

風土記の丘の花だより¹¹⁰

今、そしてこれから見られる植物(2021年11月13日)

先日の雨の後、また寒くなりました。季節はだんだん冬に近づいて行っているようです。野山の花も少なくなってきました。万葉植物園ではナラ枯れ被害にあった木を何本か伐採していただき、ほんの少しだけ奥まで行けるようになりました。



おかげでマユミを見ることができるようになりました。きれいなピンク色に色づき、実が割れて中からさらに赤い種子が顔をのぞかせています。昔、この材で弓を作ったことからこの名前が付いたと言われています。コマユミ(小さな写真)も、修復古墳西側の梅林に下りて行く左などにありますが、今年は実がとても少ないです。



アキグミの実もなっていますが、数えるほどしかありません。資料館東側の坂道を下りきって、大きなニッケイの木の根元にある木です。初夏に花が咲いて、秋に実ります。このあたりで最も普通に見られるグミは秋に花が咲いて春に実るナワシログミです。昔、私を含め、子どもはよく食べました。甘いものが少なかった時代とはいえ、少し渋くて、酸っぱいグミの実をよく食べたものだといふ今更に思います。



タンポポの綿毛もたまに見かけます。今、見られるものは全てセイヨウタンポポと思ってまちがいないでしょう。この辺りでは真冬でもセイヨウタンポポを見ることができます。外来植物の強みですね。そうでもしないと、在来種との生存競争に立ち向かうことができないですね。



サネカズラの赤い実が目立つようになってきました。別名を「美男葛・びなんかずら」といいます。この茎から出る粘液を整髪料に用いたことが由来です。この写真は広場の少し上にある小さな池、新池の堤で撮りました。ここが間近で見られる格好のポイントです。ツバキの木に絡みついています。晩秋の野山で一際目立つ木の実です。

松下